

日本作文の会編

# 日本の 子どももの詩

秋田



日本作文の会編

日本の  
子どもの詩

秋田

岩崎書店

日本作文の会  
日本の子どもの詩 5  
岩崎書店 昭56  
110p 21cm  
内容：5 秋田  
〔分〕911

日本の子どもの詩 5 秋田

一九八一年三月二〇日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二  
電話(〇三)八二二―九一三二(代)

## はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ぜんたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などもよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくりだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「秋田編」であります。どうぞ、ひとつひとつしずかにお読みください。

もくじ



1918  
～  
1945

8 きてび

がん

秋空

おとうさん

9 タバコノムシ

たろっぺ

馬車ひき

夕方

10 畑の中

おちつばき

芽

11 不景気

りょうし

ほたる

ふぶき

12 つつじ

ふゆやすみ

おひさまとにわとり

13 せんせい

雲

与三郎

14 父

黒くな

15 馬耕かけ

冬になった

月夜

月光

16 ぼん踊

池

石とぎ

しずかな晩

17 新しい傘

にわたりのけんか

トンボ

18 なわまるき

去年の火事

19 死んだ羊

稲刈りの夜

20 まゆ時

出水

21 この船は沈んだ

遠足

22 算術

電報


23 誰もいない夜  
夕暮  
24 秋の月夜



1945  
～  
1959

26 あめんぼのうた  
やぐらのあかり  
春  
27 ポスト  
けんか  
28 村のバス  
はしりのさけとり  
春がきた  
29 トコヤ  
つなひき(すお神社)  
30 春の土  
雪わり  
31 あひる  
べごこ  
ともたち  
32 はいしゃ  
あそんではいなし  
33 ほごされる大えんとつ

34 雪詩集から  
かせぎ  
35 はちの巣  
かき  
こけし人形  
かたたたき  
36 こうばのうた  
きつつき  
37 いねかり  
馬の運動  
夕焼ごろ  
38 山崎さん  
なんきん豆  
ぼくのおかあさん  
うし  
40 木を切るうた  
山  
41 しばしよい  
42 わらぶち  
43 たろんべ  
44 ふぶき  
車ひき  
45 なわなし  
雪  
46 父のハモこさえ  
雪の夜

57	56	55	54	53	52		50	49	48	47	
とうさんが給料をもつてくるとき	かあさん 三人のアイスクリーム屋	先生のせなか 窓	手つだい 教室のあな	たいひはこび 先生	せんせい カミナリ先生 先生とわたし 先生		アルバイト	東京ふれ 松	くつあらい 兎のわな 肥ひき	田沢湖の夜 はつ雪	ラッセル

1960  
~  
1969

	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	
日曜日	雪	冬がやってきた	かあさん 算数の時間	よった父 大根あらい	かあさん 屋根の雪	かあさんの手 冬がこい	たこあげ 働きにいく父	雪の日	とうさんのこと	足あと 松ぼっくりの思い出	頭 宿題	夕やけ いねあげ	しょうぼう 村にきた自衛隊に	差別 テレビ

72 おとうさん



1970  
~  
1979

74 ひよこ

ばっきゃがおえた

ふきのとう

75 きゅうしよくのふくろ

さしみ

76 たっこ森

おとうさん

ぐみとり

77 わらびとり

せんに話したいこと

待っていた春

78 春

目ざめた川

かたつむりのあかちゃん

ふき

80 いねの花

ふきのぼし

いね

くさとり

81 泳げたこと

きり

82 ふきとり

むかえ火・じいだ、ばばだ

83 つぶされたかえる

アルバム

84 いねの花

男鹿で

いね

85 からす

おかあさん きらい

86 そんごくう

先生

87 いねはこび

作文の話

88 歌と家族

心ない人

89 百しょう

カメ

90 ままかせね風

幼い頃を思い出して

91 言葉

俺たちの村

92 先生がぶりっこをたべる

ちぎれたてるてるぼうず

93 おとうさんのおい

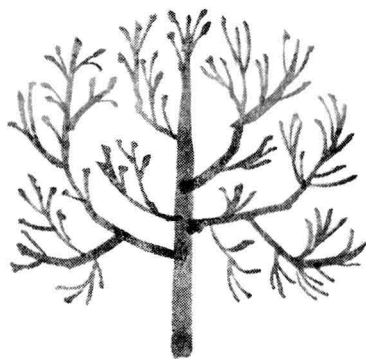
おとうさんからきた手紙

94

- 102 101 100 98 97 96 95
- とうさんが行った  
 父さん  
 かあさんが帰ってくる  
 ともだち  
 大根ほり  
 冬  
 三十年たったら  
 冬の朝  
 冬がやって来た  
 東京がとうさんをつれていく  
 道つけ  
 雪よせの祖母

- 110 107 106 105 104 103
- 海鳴り  
 いのこり  
 冬の朝  
 放送当番  
 父の出かせぎ  
 父よ兄よ  
 狭い道  
 \*
- あとがき——秋田県の児童詩指導の歩み  
 この本の編集をした人たち





1918 ~ 1945

(大正7年)

(昭和20年)

ここからあとのページには、

\* 日本の子どもたちが、自分のことばで詩をかくようになったころ。

\* 児童自由詩といわれたものから児童生活詩といわれるようになり、長く日本のおとなや子どもにしたしまれた詩がうまれたころ。

\* 人の心をゆさぶるような詩がつぎつぎと育っていったのに、長い戦争のため、それがかけなくなったころ。

そのころの秋田の子どもの詩がならんでいる。

きてき

伊藤重治 小4

あのかきてき

たんぽに聞えただらう

もうあばが帰るよ  
(母)

八重蔵  
やえぞう

泣くなよ

南秋田郡金足西校(指導)鈴木三治郎

がん

すがわらとみぞう 小1

がんに なって

とんで いきたいな

おおやぎぬま ままで

とんで いきたいな

雄勝郡樺川校(指導)佐藤俊吉

8

秋空

安田章吉 小4

秋空はわるい空、

いつも 海がある。

いつも、人たちくどいてる。

りようし 二、三人、

販売所の前にさむそうに集まって、

くどいてる。

白いあわを立ててくる波見てくどいてる。

由利郡金浦校(指導)鈴木正之

おとうさん

佐々木力 小2

おとうさんが、はまにいて、夜明しました。

おとうさん、ぼく一ししようけんめいに

べんきようするよ。

(優等)  
ゆとするよ、ぼく。

由利郡金浦校(指導)鈴木正之

タバコノムシ

スガハラヨシミ 小1

タバコノムシ<sup>(虫)</sup>ヒロイデ

タバコバタ<sup>(花)</sup>キノナカデ

ヨコラムイテ ダマツテイタバ

トオクカラ

アオイ ヒカルガ

コソツトキマシタ

雄勝郡椿川校(指導)佐藤俊吉

たろっぺ<sup>(つら)</sup>

関根くに 小2

うちののきばに

さがった たろっぺ

つめたい

いろだ

雄勝郡椿川校(指導)関瑞臣

馬車ひき

藤原てい 小5

酒屋に酒買いに行った。

酒屋の前に馬車がたくさんいた。

馬はみんなぬれて、かいばをたべていた。

頭やせなかの毛は、みんなよりになっていた。

酒屋の土間に

馬車ひきがたくさんいて、

か<sup>(目)</sup>やきあげして、酒のんでいた。

由利郡下川大内校(指導)大友兵蔵

夕方

斉藤郁子 小6

おそく家に帰ると妹が泣いている。姉は困ったように、いろいろを掘り返している。今まで学校にいたのが、<sup>(はずかし)</sup>しよしくなってきた。急いで妹をぶって外に出たが、「あばあ、あばあ」といって泣きやまない。だまって家にはいろ

う。なかなかだまらない。妹をおろして柿三つもいだ。妹にくれたが投げて食べない。

裏の口を廻って物置のわきに行く。母がいな  
いだろうかと思たら、たんぼで稲かけてるよ  
うだ。細いくろを渡って行くと、下駄がごろ  
ごろして歩きにくい。はさばには母がいな  
いで、弟まで一生けんめい稲をのべている。

まえ廻った。座敷のひらきまで来たら、母が、  
雨だれせきで菜っぱ洗いしている。まっかに  
こげてる手が痛いようだ。子守でなかったら  
手伝いたいな。

由利郡下川大内校(指導)大友兵蔵

## 畑の中

越中屋浄女 小5

ひとり スカ<sup>すいば</sup>ンコをたべながら

畑の中を通った

さむい夕暮の風が吹いて

ホッペタが ひやりとする。

由利郡下川大内校(指導)大友兵蔵

おちつばき

館岡時子 小6

音のしない雨  
つばきの花を  
おとしてた

秋田師範付属明徳校(指導)千葉治美

芽

斎藤キミ 小4

足もとの  
黄いろい芽  
ふまないで よかった。

秋田師範付属明徳校(指導)滑川道夫



不景気

伊藤重治 小5

豊治が

米と馬 (ぬすんだ)  
とにしたら

その金で

百姓がつらいとって

東京へにげた

(父)  
どは ないていたつけ

南秋田郡金足西校(指導)鈴木三治郎

りようし

小川敏子 小5

みんなは 海へ

はいるのに

りようしは

日に照らされて



だまって

網を干している。

秋田師範付属明德校(指導)滑川道夫

ほたる

鈴木政之 小2

ほたるこは

ぐつと いきを ついて

はらに ちからを 入れて

とんで いった。

雄勝郡椿川校(指導)佐藤俊吉

ふぶき

木下義徳 小2

学校の

まどの ところで みて いると

ふぶきの 中を

だれだか

まるこく なってはしって いく

雄勝郡椿川校(指導)佐藤俊吉

## つつじ

佐々木徳次郎 小2

山ばたけの そばに

赤い つつじが さいて みえる

かっこうどりが ないて、

つつじから

かっこう かっこう きこえて くる。

雄勝郡樺川校(指導)佐藤俊吉

## ふゆやすみ

村上きぬ子 小1

ぞうきんを

二まいさしました

一まいは

すずりにつかうのです

一まいは

ざしきをふくのです

おばあさんに

一まい 五せんでうりました。

おばあさんは

わたくしから ぞうきんをかって

よかったといいました。

## おひさまとにわとり

おぬきのぶお 小1

おひさまに

めが ないよ

めが なくても

あさまは <sup>(あさ)</sup>ひがしの山に

でてくるよ

にわとりさんも

はやく

おきれと ないている。



せんせい

加藤なかえ 小5

ぐんぐん せめて くる。

雄勝郡樺川校(指導)佐藤俊吉

せんせい

みんなが

べんきようしているのに

わたしばかり

がっこうさ こないので

なつても しりません

うちのひとは

かやかりに いったので

めざまし(るすばん) しています

そらが あかるく なりました。

由利郡下川大内校(指導)大友兵蔵

雲

木下義徳 小2

(川上)

かみから 出てきた くもが

小五(山の名)星台から きりに なって

与三郎

池端仁一郎 小5

与三郎コ

なくな

与三郎も

寒いから泣くんだ。

だいてあたらう。

屋根の たろき(つらら)

ひかてらあもの

与三郎コ

なかないで

あだれ、な。

山本郡富根校(指導)関瑞臣

## 父

岩淵幸子 小5

春になると

とうさん樺太からかえってくるかもしれない

そうすると みないっしょにくらせる

すこしらくなるかもしれない

だけどうさんかえるだろうか

お金がないから

かえってこないかもしれないと

かあさんいつていた

このごろ 寒はとでもさむい

春がくるまでときどき冬がくるようだ

何だか春がまちどおしい

とうさんこないのさびしいけれど

春がくるとたのしい気がする。

由利郡金浦校(指導)鈴木正之



## 黒くろくな

佐々木留五郎 高2

市太郎と二人、

停車場からの帰り

寒い顔で——角本の庭の中をのぞいた。

市太郎の家からつれてきた黒が

よごれた庭にうづくまって寝ている。

市太郎が「黒」とよんだ。

黒がキリツと光る目で僕を見上げた。

ヒーヒー鳴いて

ビジョビジョした庭をはね廻った。

水ポンプにつないである綱をふりもぐとする。

おれが「黒」と言って、

ガラスを軽くたたいた。

おれの方を見て、

「ウーワン」と尾を悲しく振ってないた。

市太郎が、「黒、黒」と言って戸をたたいた

後を向いて「いごであ」と俺に言った。

おれも寒い声で悲しく言って、